

外交政策における水資源 -国際河川の開発利用を巡る中国と周辺諸国の関係-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, ヨウ旭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/00023135

外交政策における水資源
—国際河川の開発利用を巡る中国と周辺諸国の関係—

政治学専攻

陳 ヨウ旭

1 問題意識と目的

内陸の後背地に源を發し、海に注ぐ国際河川は、陸地と海をつなぐ役割を担っているため、地政学的に重要である。広大な内陸部と海洋を有する中国は国際河川の問題で、周辺諸国と「高頻度—低強度」の対立状態にあり、河川の問題は、すでに中国およびその周辺の経済発展や地域の安定を左右する重要な課題の一つとなっている。このため、本研究は以下の2つの問題意識のもとで、近隣諸国との間に存在する国際河川を巡る紛争に対する中国の対外政策の考察を試みたい。

①国際河川において、なぜ開発対象あるいは開発対象外というような違いが生じ、特にそれらの違いが中国と周辺諸国との関係にどのような影響を与え、どう変容させたのか？

まず、水資源の安全保障は国家間関係の一部であり、国際システム上の関係から大きな影響を受けている。一面では、非伝統的安全保障問題である水の問題は、国家間関係に決定的な影響を与えるものではないが、国家が平和的・協調的な関係にあるのであれば、水の問題を対立や紛争ではなく、協議や協力で解決しようとする傾向が強くなると考える。もう一方の面では、国家間の多分野にわたる協力メカニズムや枠組みの存在は、水の問題に平和裏に対処するという基本的なアプローチを生み出し、水に関する協力の実現に寄与することになる。

そして、中国と周辺諸国の水資源に関する安全保障関係の構築は、水質保護、水の配分、水力発電の開発、流域の環境保護、水資源のガバナンス及び流域の経済活性化に関連し、さらには複雑な地政学的要因などに影響を受けている。

全事例を合わせて考えると、中国は周辺の10数カ国との間に、いずれも紛争にまで至るような水資源による安全保障上の問題を有さないが、露・印・越3カ国との間では低強度の紛争を抱えており、あるいは過去に紛争が起きたことがあるという歴史を抱えている。全体として、中国の周辺諸国との水資源に関する安全保障上の関係は、「低衝突—低協力」と特徴づけることができると考える。

また、中国の周辺地域において、中国はほとんどすべての国と概ね良好な二国間関係を維持しており、水の問題で関係のある16カ国のうち、インドと特殊関係を持つブータン以外の15カ国とパートナーシップ関係を確立している。これは、中国とその周辺諸国が水の安全保障関係において低い対立状態を保ち、国家間の全体的な協力関係の発展に伴い、水資源分野での協力も深まりつつあるということを決定づけているのである。つまり、中国とその周辺諸国との間に戦略的パートナーシップ関係が確立されていることは、中国とその相手国間の二国間関係に関する協力的アプローチによる交渉の基本原則が明確に示されているのである。

総じて言えば、中央アジアにおいて、中国が水の問題でカザフスタンに対して協力を行った理由としては、1、一帯一路の推進 2、「3つの勢力」の撲滅 3、天然ガスの供給 4、上海協力機構（SCO）内での連携などの課題で、カザフスタンからの支持は不可欠のため、中国は水の問題で同国と協力してきたということになる。

東南アジアにおいて、中国が国際河川の問題で協調姿勢を示した動機の背後には、対ASEAN外交の位置づけによるところが大きい。まず、中国の対東南アジア外交は、常にインドシナ半島5カ国と南シナ海に面

しているもう5カ国を同時に考慮しなければならない。水の課題は、南シナ海のほうに比べ、センシティブでなく、協力に至りやすい分野であるため、中国が経済的及び技術的優位性を発揮し、水関連の公共財を周辺諸国に提供し、水に関する協力のメカニズムを構築できれば、水分野での対立状態を緩和できるだけでなく、水での協力を通じた関係の改善や、南シナ海問題の解決の促進にもつなげることができる。このようなことは中国国内の学者に、「川と海のポジティブな相互作用」と呼ばれている。また、ASEANと中国の貿易と投資は毎年増加傾向にあり、2020年には双方が初めて互いの最大貿易相手となった。2020年11月に署名されたRCEPの発効と相まって、中国・ASEANの経済的結びつきが今後、さらに強くなると考える。

北東アジアにおける中朝国境になる国境河川に関して、まず、ユーラシア大陸の沿岸部を重視する「リムランド論」を提唱するスパイクマンの地政学理論の視点から、北朝鮮が中国にとって、いかに重要なのかという一因があり、他に、国境河川における両国の協調関係は、「鮮血で固められた友誼」と呼ばれてきた中・朝の伝統的友好関係によるところも大きい。

そもそも南アジア地域では、長い紛争と領土問題の歴史があり、政治的、宗教的、それにエスニック的な違いと相まって、各国は水資源問題への対処に関し個別行動の形をとっている。1947年の分離独立以来、インド、パキスタン、バングラデシュ、ネパールなどでは、水の配分や水開発をめぐる、常に紛争や対立の状態に陥っている。地域大国としてのインドは、チベット高原南部の領土紛争地域を流れるブラマプトラ川の水力発電の開発を急ぎながら、上流域における中国の開発を脅威とみなしている。要するに、中印両国間の水問題は、南アジア地域特有の地政学上の情勢と密接しているため、それに関する協力はかなり限られている。つまり、1、アルナーチャル（蔵南地方）州をめぐる領土紛争、2、地域覇権争い、3、貿易依存度の低下という3つの要因が、中印二国間での水資源争いを激化したのである。

②「一带一路」構想を推進するために、中国が構築しつつある水外交（water diplomacy）はどのように形成され、どのような特徴を有しているのか？

水資源の共有の問題では、一方で、中国は自国領土内の資源を開発・管理する権利を正当的に行使し、多くの国際河川の上流域に位置することから、そうするのに有利な立場にある。もう一方で、この権利の行使がもたらす潜在的な危機をも認識しており、妥協が必要な場合には、中国は他国の利益を尊重する意思を示すなど、危機を回避しようという対応も見られる。このように、中国は常に逆説的なジレンマに陥っている。この状況の発生には、下記の2点によることが大きい。

1点目は「一带一路」に起因するものである。「一带一路」構想は地理的に、ユーラシア大陸の後背地を横断するが、世界で最も環境生態的に課題のある地域の一つであり、ほとんどの国が様々な形で水の安全保障問題に直面している。その中で国際河川に関する開発利用は、「一带一路」構想の推進を成功させるために必要な安定と協力を損なうという一面を持つことから、水資源における協力は中国の近隣諸国との関係融和に関する打開策という重要な役割を担ってきている。

2点目は中国の核心的利益に対する理解に起因するものである。中国外交が協力的対外関係を構築することにシフトしていることと相まって、国境を超える水資源の問題も、中国の核心的利益に関する議論において重要な議題の一つである。

中国が安全保障戦略として水資源を重視することについては議論がある。水資源を巡る安全保障は、中国の国際河川を巡る戦略的利益を理解する上で強力な視点であるリアリズム系のロジックにより提唱されている。リアリズムの視点によれば、国際関係において、水資源は中国が地域におけるリーダーシップを確保するための重要な問題領域とみなされることを示唆している。この視点は、中国の水利用がその国益との関係でどのような意味を持つかを強く意識するものである。特に水資源に関するリアリズム系による分析の結果として、下流域諸国に対する国防上の利益、水の覇者としての行動など、中国が地理上の位置を利用して物質面での権益を追求しているという主張がなされている。

仮に経済的後進の国境地帯を流れることがほとんどで、そしてそれらの全ての地帯が少数民族の集住地域

となっている国際河川を巡る問題として捉えるならば、領土主権の安全保障に関する核心的な課題と位置づけることができる。つまり、水資源は依然ローポリティクスかもしれないが、水資源を巡る国際河川流域の安全保障は、高次元の政治課題ということなのである。

国際河川における水資源問題はすでに中国と周辺諸国との関係を左右する重要な要因となっており、「一帯一路」構想の推進過程において避けて通れない問題となっているため、中国として、積極的な水外交の取り組みと、関連する紛争や対立への適切な対処が求められている。そこで本研究は北東アジア、中央アジア、南アジア、東南アジアの4つの地域を流れる6つの国際河川を対象として分析を行い、中国とその近隣諸国との全体の関係を捉えるとともに、経済発展と「善隣外交」を重要目標に据える外交政策により、国際河川に関するその課題の全貌を明らかにしたい。

一言で言えば、中国の水外交の当初の役割は、水含む協力メカニズムの構築を通じて、水資源紛争、現地社会固有の紛争、流域自然環境の悪化を効果的に改善し、一帯一路構想全体の発展に、利用するためのものであったが、今は水資源を周辺諸国との関係改善のための潤滑油として活用しながら、水外交という名義で、他の領域での難題を打開する道具としてのものとなってきた。

2 構成及び各章の要約

本論文は、part. I（概観）と part. II（事例）の二部より、9つの章で構成している。

序論としての第1章においては、①問題の所在（なぜ国際河川からの視点に依拠するのか）、②研究目的（中国の周辺諸国との関係の中の国際河川はどのような存在なのか）、③ハイドロポリティクス（水政治学）と覇権安定論からみる先行研究及び本研究の理論的支柱、④比較事例研究のメリット及び事例の選択とデータの収集を紹介する研究方法の部分と、⑤研究の意義及び論文の構成、となっている。

第2章から第4章までは概観の部分であり、第2章ではまず、中国水資源全体上の状況を紹介し、その後中国の水資源管理計画や水資源ガバナンス・システムに注目し、説明を行う。その上で、古代歴史の時代から毛沢東の時代までの「水利帝国」としての中国はどのような存在であったのかを説明し、そして、中国の政治指導者に理工系出身者が多い点に注目し、こうした中国の伝統文化と指導層の教育歴が中国の外交戦略を影で支えていることについて分析を行う。

第3章は地政学・国際関係論の視点から、気候変動がチベット高原の水資源確保に与える影響を分析する。まずはアジアの給水塔としてのチベット高原の概況を説明し、その後、気候変動がチベット高原水資源の安全保障に及ぼしうる影響を解明し、それらの影響は食料安全の他に、民族紛争と地域不安の引き金にもつながるとの分析結果を述べる。

第4章は、水外交の諸定義に基づき、一帯一路構想に伴う中国の水外交の現状を解明する。具体的にはまず中国周辺の三つの地域の国際河川を比較考察し、中国と一帯一路沿線諸国がともに直面する水危機の実態を概観する。次に、こうした水資源の逼迫状態を引き起こした国際的・流域的・地政学的及び中国国内的要因を考察し、その上で、水資源の一帯一路構想の中の位置づけ及び重要性を議論し、国際河川に関して、中国の水外交が何を狙っているのかを解明する。

第5章から第8章までは事例研究である。まず第5章は、国際レジーム論から考えた東南アジアメコン河における中国の協調の姿勢と、リアリズムの視点から考える中国のダムによる「上流における非協力的な覇権国」としての批判、この2点の間に存在している「相互依存と相互対立」というギャップを埋めるためにメコン河流域の国際環境と中国国内の政治経済的要因から、ダムに関する紛争の解明を通じて中国と流域諸国の関係を考察するものである。

第6章は中国とインドとの間を流れる南アジアのブラマプトラ川(中国名:雅魯藏布江=ヤルツアンボ川)を事例とし、国境紛争に伴い近年両国間で生じている水資源紛争の要因と実態を解明するものである。これまでの中印水資源紛争に関する研究は必ずしも中印両国の領土紛争及びその歴史にもたらされた「負の歴史認識」という文脈から明確に分析されていないため、この章はコンストラクティコンの理論から考えた中印

関係において、重要な意味を持つ歴史認識や相手国のパワーに対する理解、及び国民のアイデンティティの面に対する考察を行うことにする。

第7章は中央アジアのエルティシ川とイリ川上流における中国・新疆の水資源開発の実態、つまり中国はなぜ両河川の水資源を精力的に開発しようとしているのか、その原因を解明した上、カザフスタン国内の水資源問題と同国の中国に対する懸念を論じた後、中国が水資源で対カザフスタンに譲歩した理由を、地政学戦略実現のため、エネルギー安全確保のためと、少数民族集住地域安定性維持のためとしてまとめている。

第8章は北東アジアにおける鴨緑江と図們江はいかに中国の国内河川から中・朝・露3カ国の国境河川となったのか、その背後にある近代の歴史を触れ、次に現在の両河川流域における多国間協力進展の様子を水力発電が中心になる水資源の開発、航行的利用に関する水路の打開及び河川の中の島や砂州の開発という3つの側面から実態解明をする。最後は北東アジア地域における国際河川が、なぜ中国にとっていかに重要なのかを解明し、地政学の視点から論じる。

第9章は結論部分であり、上記の4つの事例研究によって導かれる結果を比較した後、まとめを行う。それに補充として、南シナ海問題から、国際河川問題に与えた波及的影響及び国際河川の水資源をより強調して利用できる政策提言も行いながら、第9章において議論を展開する。